

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	池端 露子
論文題目	現代イスラーム世界におけるスンナ派・シーア派和合論と多宗教間対話 —ヨルダンとOIC (イスラーム協力機構) を事例として—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、中東地域研究およびイスラーム世界論の一環として、イスラーム世界内部のいわゆる「宗派対立」と他宗教との「宗教対立」に対して、どのような和解や平和構築の営為がおこなわれているかについて、中東・アラブ諸国の中で宗教的な意味で1つの要をなしているヨルダン・ハーシム王国と、イスラーム世界を束ねる国際機構であるイスラーム協力機構 (OIC) を事例として、考察をおこなったものである。</p> <p>第1章では、事例の考察の前提として、現代イスラーム世界を政治思想の面から位置づけている。近現代におけるイスラーム諸国は、植民地化や保護国化からの独立などの経緯を経て近代国家を形成してきたものの、国家と宗教の関係については前近代のイスラーム王朝の時代を継承する諸要素があって、他の地域とは大きく異なっている。それを国家体制、法体制、宗教共存システム、国際関係の4つの側面から詳しく論じ、宗教間・宗派間の問題を論じるための研究視座を明らかにしている。</p> <p>第2章では、ヨルダンが預言者ムハンマドの血統を引く君主制国家として20世紀に成立した過程を明らかにした後、そのような君主制と「国民国家」の2つの面が王家の持つイスラーム的正統性によって統合されている現状が明らかにされている。特にそれは、聖地の保護政策や宗派和合論の発信などの具体的な政策と結びつけられて論究されている。</p> <p>第3章では、ヨルダンの「宗派和合論」を、1970年代末以降の中東政治の動態、特に21世紀に入ってからのシーア派革命主義とスンナ派サラフィー・ジハード主義による「挟撃」という動態と連関させて考察している。その中でも、20世紀中葉からの「諸学派近接論」を継承した「アンマン・メッセージ」の内容と思想的意義、国際社会へ向けたイニシアティブの重要性について、多くの新しい知見を加えながら、明らかにしている。</p> <p>第4章では、ヨルダンが推進する宗教間対話である「共通の言葉」イニシアティブに焦点を当て、その内容と思想的意義を明らかにしている。このイニシアティブは他宗教の中でもキリスト教との対話をとりわけ重視したものであるが、それだけではなく、キリスト教は西洋の宗教であり中東・イスラーム諸国にとっての「他者」という通念を覆す内容を持っている。つまり、ヨルダンは自国をキリスト教発祥の地として位置づけ、王家はイスラームとともにキリスト教の保護者であるというスタンスを貫いているのである。本章では、その具体的な現れとして、ヨルダンが力を入れているキリスト教文化遺産保護政策をも詳しく紹介している。</p> <p>第5章では、考察の対象をOICに移し、OICの形成と発展を歴史的にたどるとともに、</p>			

汎イスラーム主義の系譜の中にこの国際機構を明確に位置づけている。また、国際関係学、特に国際機構論を援用して、「イスラーム的世論」という分析概念を提案し、OICがその世論形成において果たしている機能を考察している。

第6章では、OICがこれまで模索してきたイスラーム的な理念に立脚する平和構築の営為について、発足当時から現在に至る首脳会議の内容を「テロリズム」問題を中心に分析して、国際世論形成がいかになされてきたかを論究している。さらに、OICが下部組織を含めた多様な活動の中でイスラーム世界を結ぶプラットフォームとして機能し、イスラーム的な国際規範形成にも貢献してきたことを明らかにしている。

結論では、以上のような研究の成果を総括している。宗派和合論や宗教間対話についてヨルダンを中心として、21世紀に入ってから紛争に対応する新しい思想的な内容と具体的なイニシアティブが実践されている。また、ヨルダンのイニシアティブは、OICを通してイスラーム諸国に共有されている。さらに、OICは、軍事力などの裏付けが必要な紛争解決に力を発揮してきたとは言えないものの、イスラーム世界の国際世論形成、さらには規範形成に大きな貢献をしてきたのであり、それが紛争の抑制や過激思想の波及への一定の歯止めの役割を果たしていると結論づけられている。